

新句紀の巻川初

274

利9
3869
10



新句紀の巻川初

利9
3869
10

神の曳ノ赤繩もるは忌の切
 あり性か術の如きハ走々金子
 素一休書き少しく関らしハ
 原くもる素性緩死之身も
 新し似ぬ娘未女房ハ京育
 橋のやね朝澄の泣へ六拾りハ
 子愛目換しと語て不二の爰
 内治世の耳もを初る花の旗
 一生の奢り橋てかうれ 里心散々

戒名の朱を入懸し安振并
 ことをも波みきや(殺業)失背の奴
 即言を止しねは松の喜
 柴賣の苛し縛つし杜若
 中さくふおの付カぬハヨウ
 杖文うて来ても友をか茂地
 芝居ももる系娘と魚り人
 尾の厭面ハ毎ハヨウ 坊シ
 妹ハ苦もあふ森入るえの叔

青山 練石 竹子 青山 里蟻 竹子 月心 花丸 散々
 谷極 楓露 青山 白萍 鶴洲 楓處 百女 青山 歩月

乱レそ免ユ〜志気の上人 浦丸
 天人の羽衣脱イ〜者運入 土木
 貸座敷始末社若吉の気が掛ひ 花山
 是後〜汗綸 言も 汗 三省
 大名是是名月の 不二 鶴洲
 時羽〜も梅〜もあ〜ね尾草月 春助
 笑ひ愈了〜と遊る 招子持 眠子
 是是屋〜又題〜されて大家之 花月
 先生〜蕎麦振〜して予〜せ 土木

花山又て屎私我〜を何ら〜い 一正
 持初〜の侍〜知〜全盛の名 青山
 神〜ヤ〜く世活〜て涙〜不〜中〜侍 戸十
 用〜用〜喜〜の緩い女房 旬 寿山
 者者 恥〜女〜の格を 彼れ 文王
 樹造も連〜く又〜下屋を 全
 言乃乃松〜も夫ぬ旅の味 志友
 簡田各ハ〜〜〜坊招子満〜 土木
 脈の上〜〜〜の出〜〜〜 医者 百女

蛇の身は丸に上りて丸が鼻に成り
小袖とて遊利もろ整束の地
渡前々をって掛しに沼子戸 棚
世か々の吹し根うなあり 以
かゝ家工仕く貸し主を借り住居
母の迷ふ綿木の敷 敷
素しる風情形智の叙音 音
傾城の瘡ハ家名を並土産 多香
大食らしひ飯三の何某 一狂

赤破家めよきる浪子父も満る 三省
来ししらし女ま廻 玉 土木
金浪に浩る昔季の舟棧さし 壽山
葱盗人捕へ 考ささし丸 土木
轉々々ふな釈又が家のねえ 壽山
又て致しそふし障子ヒツシヤリ 鬼丸
一大つ女の智恵も倍つて見る 鶴洲
あ際の立尼徐い飛がろろ 土木
大名を履ししとき地がをまえ 浦丸

並ぎ〜〜〜
 妹のや〜
 女房の旅立を
 愚痴をり思ふ
 釈の初元
 幸及とハ
 柳を〜
 猪軍陣を
 袴の染有
 李怪
 雨篠
 百女
 忘棧
 百女
 花月
 忘棧
 寿山
 忘棧

鳥引旭引
 神の名の
 小松釈子
 浪子持の
 栄の造
 庭昌さ
 斗〜
 一生を
 十
 志友
 上木
 百女
 寿山
 歩月
 忘棧
 鶴洲
 眠子

巻軸
七尾松一尾松惣のせ界 一正
とむ並一うりふ人代のあ之 土木

巻頭

浪平法策評

半人くツイぬしとるぬぐぬく
有るとをひ教をひと有りる教
カとも入しわはふで生れぬ
大度乃何不ともるし一気法を
陰床の教もやつぱも教くろ
素電へ味きを奢りの教くろ
和玉
十八
和玉
百女
一正
桃溪
いろは
孤柳
忌様

娘のむりくろ嫁の考が 活キ 和玉
誅日士の意で何不やんもの淋し 十八
一日の奢りハ仁の教く入り 和玉
他人独り 父くや枝をがれされぬ 百女
次の回へ斤縹松る素の母 一正
孫をひのが塞 素のうと成り 桃溪
沖をが仕そめてをがくまじん母 いろは
茶く煮るもヤリ 若く若のあ 孤柳
整昌さ何うハ何てへそかーい 忌様

命くも先ッ 実坐しと角力のと地 和玉
 又もコ淋し 沢柿のてり 鬼丸
 一牛とおもへハ哀もかこはより 一壽
 一玄の行しき 座のゆきかこり 竹三
 下戸の行も又上戸ハおかり 鶴洲
 下アでせひすぬ改ぐるきさね 三角
 三ツの朝去んくくと流ハ 忘機
 倒しやうとが立派な大 名信 花山
 京の地ハ豊つるももちやう 又へ 壽山

夜明が又ッて梅ハぬ夜食 任 南北
 ふメ目換しとつて不二の夏 月心
 口髪へ尾をうらハしと女 壽山
 色里も淋て遠ハ穉ガせひ 雨篠
 大切もわらふと子ハ万よあハぬ 李径
 はとーで祢ハ俄 遠 従 志友
 病ひ氣のせひ氣の毒を人 雨篠
 夏の世の昔の世界のと遊ひさ 谷檀
 爺祝も流もな氣足つりち 南北

万老飯に積んで空眼ひ
 多香
 孝りの仕カ父の乳がみひ
 鶴洲
 を文も九十又もと一と
 志友
 かへりて後務れてつゆ目足けりれ
 一竹
 鼻と朱り 師してかふるあきひ
 一壽
 志六は後への彼まを彼多 甲斐がま
 藤子
 松じ柳じ茶の結ウを足せ
 和玉
 かりの世と示は和尚もかりとけ
 忌機
 あのももも 喚入し他の灯がまへり
 竹る

乳味師香に珠とつと 仔 琉支
 神とと世法かけて流ひ不白魚とと
 多十
 房の眩暈と鳴るに半 後 竹丸
 芝で侍と扇はう治のから免之
 志友
 卷の款キと述て入り 船 忌機
 行の流るて夏の 蜀士 山 志旭
 九朝の卷套の中の套り之
 壽山
 傾々と城へお方を買とれ 全
 蜻蛉や虎の巻してハエトの 杭 一在

歎されてきつ父の元もすこゝろ
 市門をも忍れはうハ尿をとり
 法納ハ継子よをるのを
 旅戻リ瘦と家来ニ疎ト足へ
 森多う起きて多き一ゲ 船ふ
 地ニ来ルハ危ニ来ルグ喚ニ来リ
 舟一ハ中ノ父へ来る方妻の状
 買物のまつこゝ意が派多ヨ来リ
 面白ハ時出来と子ハ元徳との
 百女
 壽山
 志好
 閑虎
 岸丸
 花山
 鶴洲
 夢好
 分山

記とふかキ 福の足つねが身ヨ余マリ
 いふるがやしくそろり 堅くふ居るこ
 南テ工ハきつと来るね 能イ人
 志とれヨも梅ヨも家りね 尾 昔月
 未正へ切しく 持カぬ 泊りし
 造玄の巖がつつと流し善 法
 呵リ人のけりも果 鞍の敷ヨ入
 大名のま似を承ルと 志好
 金浪ハ草ヨもヨも 於茶の原
 練石
 一狂
 琉支
 春助
 眠子
 土木
 壽山
 琉支
 志友

茶のむ大図の顔たろりーの 百女
 京の地を放して京のをろり 壽山
 こそ流も汗 綸 云も 汗 三者
 出せうろを病を母考りかり 志好
 樹くの雪月を物に仕る庭 志旭
 劫定ハ知るね 頰之 柏人 壽山
 色とーのふ人の世の谷之 孤柳
 り烈く必ふハ下多を考り之 雨篠
 考りハ恥ちつとも恥ちつと 谷橋

巻軸
 忠坂の杖々杖を洋 五ノ十
 傾城の嘯ハ赤名を並 多香
 少代 一伯をも選る今の清代 全

巻頭
 素閣評

一日の姿ハ仁の教工入 和玉
 ちちとつとみと屋敷くハ殿の士 楓野
 ぞ猫迷ひ 瀧乳石 又 一壽
 儉約を母工破くは女の子 秋丸
 其侍志工もそは術を 流子法 小田照

長命ハ一杯何コトハ傳ハセ
之従と取れてうら通ひ止
樹下石上コトをたろ以友
従才日士祝も多拔ハ令息之
下戸てまの伴政るをささぬ
又る年骸も孝コ彼岸 灸
張法の書生をさすコ指さくれ
仲のちねるも喜コも杖の用
あで拵える車飽る札の灯
蘭子
歩月
小田照
五柳
三角
复好
寿山
全
一壽

洗槌を付し拵えのまの白
子挑灯母ハ子衣の雲歩り
上人の足たそれと敬持
入鼻々と海で飛退く禿とも
石拔付し、洞コと熱子の意がえれ
医者の氣コヤまの痛瘵を殺ひれ
舟夜の内庭コ咲く小米花
糸物を下りて潜花訪ふ麒麟
老人の美理愁しくハ救コ入
和玉
小田照
浦九
一正
和玉
一在
息九
多香
浦九

まもちも浪子持ふる八日か延る
 棧へ下ろく書く箱の様
 面白きどらも望日へ丸が舟ね
 七舟ころも舟も森急垂せり
 一牛の迷を洗ふ
 貝合尻をル洗うか
 連う切れる仲居の浪子洗
 同よと恥問を舟の舟洗を引
 〇まつて洗う来日と引
 壽山
 全
 秋九
 洗我
 孤柳
 壽山
 練石
 何高
 楓

振油の使の表へ赤肉の眼
 桔梗の根掘んで戻る
 半助の抱子て余も浪子終
 送子等ハ撥で欠乳を押し付
 出々々長い傍もる子屋
 炭はくを江ごと高懸柄に合
 世を尻もりやめ乳唐も居へ尻
 津月士疑ひ合ふて表が清
 三川の中けとも男流格う足
 鬼丸
 和玉
 南北
 志旭
 桂雨
 里竹
 土木
 里蝶
 琉支

寝くを訪ふ日傍の光を放き 一正
 鼻又呵られて吸ふきくべし 土木
 髪容持くあるの才きく 鬼丸
 金浪もきひ是へて香う朱り 楓心
 鞠の夢古くはくはるあ いろは
 上下の皺しやてくは教よ入 竹三
 時のくまこと時子の破へ眼 桂雨
 朱奪ふまをハ下女の杜若 和玉
 堪忍を仕課ふを返して擔はく 寿山

啼らくは京へ去るまきく 桂雨
 情丸ハ尺書に仁をほの父 一壽
 分削がけは尺附く故のけね 忌機
 神の曳赤縄もるは忌の切 寿山
 云をうそへへの語は歌を仕る 志友
 新しは是めで林く記を分ける 寿山
 来しはくは女ま廻 玉 秋丸
 小説詠や月書巻の自在釜 乐虎
 先生が育てく娘河豚も喰らふ 筆丸

隠さるる母ハ同くハ巻陽ノ
とこ名ハ朽ぬ朽るる髪花の地
瓶ノ跡礎はてはよもるる葉の友
格式が物ナして朽ハ木で熟し
宗禱で之身を送し 望法巻
子を可る物もむかひが恥し
すも昔ハまゝに月夜懐し
才を供人の眼ノ光が咎かめ
上家の欠光ノ標る松人
篋子 篋子 篋子 篋子
小田照 一狂 巻月 青山 桂雨

借 縮洞
伊豆ノ梅 艶未女房ハ系育 里螺
契吟々るハし思ふハ一子 透キ 百女
笠上ハ表為の侍ハあしやね 小田照
岸もろく月をえ起つ物成表 眠子
秋ハ今ホムとらりと再々告 一壽
夏ノかこさすくく門徒月行 壽山
簪の竹が拍子て味考ダ 栲レ 月心

一寸の草ももスアのの美ん
 樹造りも力も召サる別業
 村ころころ宮華法とる八束の穂
 浪子没の事改め糸も巻も仕
 字の只々ぬ案内の古考も特の風味
 村の日ハミ後樂樂樂と化
 仕ひ世も足るのよとせざる母
 堪忍ハ掃くろく初ふ髪
 杜若自刃も立て伐り終ひ

南北
 志友
 忘機
 狸睡
 志旭
 一正
 一狂
 南考
 いろは

りふと来て鼻が欬くはとひり
 苦ハ列子停妹イ郭と奥勤ノ
 妻と伏くせつとく関と
 下戸のけ花ん上戸ハおかりり
 りふハちち花と仕方を差へられ
 價のふれぬ甘夏のか茂川
 自妙や案内も子と紙を密
 ひふりの折く媚を貸し本を
 乱し染ふし志賀の上人

壽山
 桂雨
 竹三
 鶴洲
 筆丸
 志好
 歩月
 友月
 浦丸

傾性一母へふ呼吸をへられ
 樹造りもつきて又よゆくお業
 江戸画よふ糸もね気儘之方流り
 大関を供よも連れて切レ盛り
 送る気も散れもさし荷持腐
 肩の力こくふ老も瘡を付と成り
 皆の氣よすふち支の又きひ
 貝拾ふ尻を早急の負よ入
 怯息を仕抜て梅の香をも受へ
 三

大同をえんもきふおと砵ひ
 素の母尼の世よ感入
 泥子袋を音ひ心をもまきか
 登根ハ雨漏り 柔一 傘サ
 們よ本素染てかこい
 心牡丹懐ふど阿ふ毛てふ
 神へ侍り精をもるう切レ盛り
 杖の旗系てきかろ泥子よ未
 傀儡師己が名と知り老初る
 全

狸睡

文王

浦元

忌機

青山

二角

桃後

小田照

三

廿柳

十

十八

志旭

一狂

青山

里探

青山

全

灰衣の月と見物で居よん 内 忌城
 各坊も娘のたよハ愛かぶる 疏支
 大切子役ハ互ねた人 万 文玉
 众副のつるをカラを屋 凡 竹三
 尼の露面のをよハま 一 寿山
 振治り流くくおを思案仕る 和玉
 素えんの京足るおよ皆残る杖 寿山
 由よ没の志子も素として力涼ト 土木
 必業事内ハえつと素 一 忌城

孝りの志ねも嘆子格の家 万女
 大男泥と提さるる葉の葉 楓六
 釜洗ふ妙の女情一牡 小田照
 一舟の套り身法も禿まて 寿山
 垂改ハハみ出て口甲くゆハ 花月
 有選ハまら 信涉の 割 鶴洲
 何でをテリや来れぬ達人 浦光
 大名コ有る気ハまらま 実 眠子
 格式ハ形ナして好ハ樹て熟 一 寿山

と文

名丈かりの皆ふを並は法が蒼
 念仏コ太鼓苗きまじいの
 發响るまで持ハぬを言位
 蚕飼神威もるも信かき止
 桔梗の根松んで居る香ニ坊
 かくくこの身代糸の念じ細
 忍カしい所がそてそんらうい
 夕ぐれの廓を向の角りー花
 暗のすれ物ナも仁の負ユ入
 里竹
 志旭
 南北
 雨篠
 和玉
 名橋
 一狂
 鶴河
 愚歌

巻軸

小つこともやぐ大紋が糸
 系糸を吐せハ長ハ女以陀
 紙層ハふなるハ方がきれい
 面白ハ付出来と子ハ気味もの
 一真ハ友佐放しと初子の日
 鬼丸
 眠子
 白女
 哥山
 和玉

巻紙

恭妻評

大名の侍ツ取もろってたまに
 ちびまをい焼しき母と層と又
 えるりささしー淡柿の照り
 岸丸
 百女
 鬼丸

繫糸昌き、何ハ何でいそかーい
 短気ハ又へり面シ脱ご氣
 椽先よみ枕迄ハ待ッ味
 奈、元の奈又はおこぬ所、杖
 猫の画で喜ぶ虎のかう下く
 夫はくたハ隔テねき、然の氣
 茶、更の山よ森てすく松の風
 一本の松よ涼くた、何六、海
 征、遊ねく女房のまき地
 忘横 壽山 楓 壽山 全 和玉 壽山 いろは 五柙

清て圃ハ花をた、清のた
 女房の氣よ、号くぬ、能智、哀
 七ハ、咬、思キハかをもど、斗り、て
 魂、扱へ、役よ、も、く、ぬ、深、り、ふ
 氣のた、くれ、と、席、夫へ、始、未、り、ふ
 伊、ま、ま、より、地、味、の、眠、立、ツ、扱
 揚、上、杖、の、ま、お、お、く、一、大、る、る
 近て、眠、し、ま、は、救、医、ま、の、根
 棟、梁、の、棟、梁、ら、し、い、ま、の、持
 夏好 和玉 志友 和玉 秋丸 一狂 いろは 哥山 和玉

うつかりと聞るもを夜蓋り
 一まつ上よが女房と出る
 果報との祝の介も物々を
 案内ハ舎人長五の杖
 辛抱一とむかへを世に浪子のちる
 物もたな一祝の初微法を
 おきれと教よき世のあや
 ち、ちけと珠女の涼一いお
 面白くもきくく止る気がた

全
 百女
 彼翁
 孤柳
 李径
 鬼丸
 和玉
 南孝
 散人

光法を思へハ淋し初出る
 能るの世法は女夫の持と形
 かおが滑て涼一い風ふく
 の喚るハ怪さ一い土地
 思案の介を女房と涼る
 油引さぬく一い女房のひき
 ちやうちんで赤女細のく一い
 ちやうちんで赤女細のく一い

筆丸
 志友
 楓
 一狂
 波静
 壽山
 杖丸
 琉支
 一狂

始末くくべしや女房のちり
了る人の旅をきく舟の浪
狐の上の念の生る美之医玄
松から登る舟の 純 景
栄の携梅舟の突圍ひとの
足るをく女夫志つこい
松魁好の業の能を足るを
意使就し入も美のこの
念仏きくい毒のまはゆ
止
いろは
百如
楓
いろは
散人
和玉
いろは
和玉

芙蓉の花てくく天の川
中もまろぬ意らう傍に用ひられ
壽令の茶女房の 飯 李径
皮切を仕てくく娘灸上戸 桂雨
牙のうらけ 徳 畏 之 壽山
あの流が下京で茶 原 忌穰
托ふえて尿恥あを仰らくい 一正
大笑の隣のはあのかい 鬼丸
婆も来ても 迹る 爰 又る 壽山

焼入をせぬと八余派で仕るのこ 三省
 貝合尻をル情ふかくし 壽山
 菊葉除根し報うけ出し 采虎
 後総て吾隠へ逃る所の徳 散人
 赤やく風よ小よつこつと 枕 狸睡
 をとえへしをを何んし 白萍
 熱焔をキユツと川急ヶ浪子何じよ 花守
 島系も内家うき世ハかハアお 谷橋
 ろくしい愈ると逃る浪子持 眠子

孫をいのが塞為のうと来り 枕溪
 笑るをましととやて急ぐまんと 和玉
 帝歎して除福をを 迹々 眠子
 出きよりを痛を母ハ孝ひかり 志好
 尼の腰面のかんしつとハ場し 壽山
 鼻が赤りや送しし犯りや 送止メる 浦丸
 名しおししとの夜も故増し 全
 あくともは総勝り心を汗あくる 南孝
 七符よも三符よも床恙母やと 洗我

屍のまゝの女房 口 軽 花月

二句両吟 下詠者の姿をこそくろ 然存 いろは

川の岸畔にあり 全終を花代 壽山

巻軸 行くとく不調ふ 去のこのの終 南寿

法納ハ備花をかけ 旅ノ又ハ 和玉

巻頭 如竹評

清々ぬを名傍ノ感ノられ 孤柳 壽山

下戸て女ハあはれがを奪りさね 三角

街をへふヤを食等が初さくら 蘭子

父の光ノ入岸 雪のち挑灯 三角

法義ノ抜ケと人月の層 三角

勢ノを喰ふがこし 初松魚 和玉

女房の光ノハ馬ノね在者表 全

約下詠の者を殺して 為水端 多香

忌癪を丸とて 為本女的情 全

ちりり起てきり け汁吸ふ 和玉

農業をうへてはむねよ宗承はる
 江戸へ行くは元気が舞い舞い
 尾宅のあひあひ木とこ
 白く白くあもるう新貨者
 押柄子源坊牡丹のあもる
 小牡丹朱よ端ふを毛でる
 ほどはつと付を語れはもの清い
 可憐系麻よのよはつと尾背
 格式ハ自然と界れ根子と出来
 多香 土木 原丸 哥山 和玉 南北 土木 和玉

劫定切のより余は眼よ急と殊扱
 根子持のあつたものここの法
 格式を放して正化も喜のよの
 肩ちつと根小判ハ拾ふものであ
 大らハヤと吾狗を獲気うり
 食つたと思案の合ふと松人
 並くく又へぬは磨之のよはれ
 格式を放して不巻の思
 傾城と巻又あつたよは奈やう
 五柳 系柳 寿山 和玉 三角 全 琉支 鶴洲 原丸

邪しくはきと来りし利髪
 傾城の赤を忌し思の赤
 面心は付出来と子ハ元池との
 多附し相とを擧るその所代
 大園の上儀入杖の季を於れ
 漢り也の面白ふ又へ世しうえへ
 役へも後又て出る世万
 かり出しと存えし結句が仙さへ
 金仏と志報高世子しとの

孤柳 眠子 哥山 多吞 和玉 一壽 鬼丸 一壽 志旭

金仏極罪のかやく存まじりひ
 かしらへ春の氣懺り子持節
 秋しつふ季ハ入はしり記念の白
 みる玉と門ト神柳の好う又へる
 神流む彩嬬素人の氣へ度り
 葱益人捕らへもささぬお
 招ふ時と仕キヤ除しハ茂即ちる
 孫食の傍め梓きのる子よカ
 揚を没ひ大るゆめ令之

土本 多吞 いろは 竹丸 忌機 土木 和玉 全 壽山

夕暮の着居から足杖が立
 足る事ゑと女夫志つこひ
 先生と若妻振ひつて守るを
 勝務子は世を仕切る小築垣
 うの持ニヤ妻も淋しく整るの地
 老初る時女房へ美理か生来
 倭人らしき何下やうに
 清も化る事人ちで浪子をか
 風系の存より所へ風船を川
 楓
 散人
 土木
 床席
 全
 筆丸
 和玉
 箱洞
 いろは

弱木のむ切ら枝がな
 命ふ程の業おて久く
 鼻で仕と腎虚先祖の元汁ひ
 公治長雀の吐し耳を付ケ
 流名て挨拶肩の行々お歳
 君う代や露の鼻を起る業
 裏ハ勝 蔭は優るあひ山さく
 洗植を汁と搦れ丸のあ改旬
 儉弱を母と破るは女の子
 桂雨
 春助
 鬼丸
 眠子
 三省
 戸十
 琉支
 和玉
 秋丸

法入る妓婦も廊の道り之
鳥柏葉の戸の存疑が信
狎楽の雨を先生丹ひり色
松枯しそる若の犯やう
あ柔やの囁けふと人
其のトこよ似せて笑ふト
具是ハ傍るものとも君々代
妹ハ若もはふ森入るを又の
秋の旗系てきふさ根子と味

和玉
眠子
散人
一止
南北
春助
全
歩月
壽山

巻軸

旗のうささ敷きてけう 加は
えせが原と始終も吟ふ
チヨコエ子奴ッ供まつれ吾の旗
寛深なる喜炊の明ら大同屋
そんと菓子巻って三ッ四ッ五カ所ふ
志人の茂原慈と〜ハ熱入
むさゝのあア〜もけ山さくら

島子
筆丸
原丸
百女
壽山
浦丸
里標

巻頭

曲坡評

う砂の松へもまぬ旗の味

志友

世の垢の洗滌をものゝ 琴 南孝
 身のり未ハ知く 忽 海 謁 眠子
 磨くよる玉の集る 舟の菴 忌 棧
 医者の氣ハそひ 瘡癒し 軽ハれ 一 在
 孫あを徒に 吟ふ 寺 男 蘭子
 運ふ 糸よ 毫の 盈る 云 驛 志友
 禁酒を 夫の 折る 舌を出し 三 督
 改を 経 候と 玉を つが 世 采 鹿
 穴流を 意 度 ちて 堅ハ 好 家 志友

芋輔の 牧子 て 金 小 浪子 也 一 南北
 金浪ハ 孫よ 子よ 子よ 於 桂の 所 志友
 的ハ 毛つ き ぬ 素の 折 志友
 培 端と 知身と 眼利の 幸 父 南北
 浪子 持も 知く ぬ 僕ハ 浪 世 界 和 玉
 為 美で 弘 毅 糸 曲 端の 風 吹 け 哥 山
 嫁を 齒 齒ハ かり くと 二 三 枝 忌 棧
 り 坊と 曲 端む くと を 伯 父 百 女
 有 人の 吃 一 沢 人 也 持 余 一 一 眠子

女々等一答倒さるる繁昌さ
 志友
 元を光ラ以爲の多ひ嫁
 全
 蘇生一と坐一和尚苦笑ひ
 壽山
 森玄のち極益減ハ 迹々
 鶴洲
 吹かす一辻を賣ハ爲を形舟
 崎子
 嫁くも母、案く物 枕
 志友
 怪思を仕る穴素一足舟れ
 いろは
 出を聞くとく一愈々人
 壽山

短敷の傍一のしを 豆の 豆
 丹心
 玄沃の嗜ひ料履のくは遠
 土木
 必し後々一の波女、二 朱
 壽山
 神ありておれぬ妹の神 活ラ
 志友
 狐女の愈乞の遠ぬを疾之 疾者
 百女
 活子を生来以才一受其文以才
 全
 後切と治てき名が活て来
 波多
 枕灯て委那の害ひ子 紙債
 一狂
 地一草一を尼一草一が葉一
 花山

竹母ハ毒臥のたまぢちう〜
 朱奪ふふさるゝ下女の牡羊
 へつと見えへいせひを素〜
 蝦蟇目〜魚床も瘡を原居没
 け〜〜う〜〜氣〜沈〜ぼる川の言
 未せ〜筆〜く〜持ぬ約
 磨ぬく魂江戸の土〜招〜
 赤内名曹蒲カ〜切交〜ん
 桂雨 忘機 和玉 白萍 岸丸 孤柳 眠子 忌機 岩橋

之形をまつると去て使ふふ
 奈人をほふさ〜とさ〜〜ん汁
 糊気の抜々と藪入の下女
 ぶあ〜〜そて思案のかり枕
 白枕灯母ハ子旅の害歩り
 隅ら忽松立板〜
 是之へあ〜と焼〜さ〜〜軽ひ下站
 花山アる屎尿家が何ら〜
 清のおうをて不遇る食
 全 和玉 稻洞 竹三 小田照 眠子 花月 正 眠子

いろくこ曲つてまを並くこを
 いけのちまをまの裾捌
 迷えがそふて芳ふ軽ひ舞
 得松こ堀松怒のせ界こ
 お梅をあらハ回まとし林あうで
 古中も言車て通ふてゆふ朱
 飛多川着つ、訓こく借衣
 ナツカるりして隣とハ不和
 口登こ尾を尻こく女飛
 和玉 鬼丸 壽山 一正 浦丸 一狂 和玉 原丸 壽山

あのとら鼻入丸の灯が消へて
 吟一の崩まぬ松の松
 猫を洗ひ大するの命あを
 辛抱の泣き嘆えも牛帳こ
 悔りも淋罷ハ他く也
 仕合子娘一家の表こご
 價のちれぬ夏のなか茂川
 魂柵へ及よとまぬ津つふ
 大名こ又倒されて大衆こ
 竹三 丹心 雨篠 寿山 多十 眠子 志友 和玉 眠子

巻軸

新とと顔と長生のお
 密淡のあ扇子ハ猿とと
 大三十日と人と夢とと泥烟爰
 太丈のあことと育う子人
 急返の帯と惚とと氣が盈と
 泥子湯と何拈因果の負と入
 せ蓋との贅と抱とと角かた
 解とね狗袴て、生ひと縛と合
 巴勢評

和玉
 瓜心
 百女
 糸柳
 南北
 多吞
 琉支
 竹と

巻頭

倭人らとさ何不やととに
 狗の内麗カと破とと改陀
 通とるいと志と男の表と拈
 禪とちの傍とさきとと緩汁
 勢とをを喰ふがとと初和魚
 子湯とかむ婆とみ出ると山さく
 磨とまると改と朱傘と定り派と
 特のふを仕とふと表とと養と
 初術とを波とと戦のとと大土和

和玉
 竹と
 丑柳
 和玉
 全
 和玉
 竹丸
 青山
 東西

チヨコ戈子奴ッ供ヨつき雪の旗
 伊連より比未の眼まッ 枳 一 狂 原丸
 弱下弦の喜を殺して落氷端 多 吞
 樞ロアヨ流して万る於母家流 壽 山
 耳チヨツとかし女房ヨ下巻を 全
 所ハ秘るを何ヨウづいて賢く 和 玉
 挑灯て委細の晴ハ子 孤 凌 一 狂
 詭名で挨拶肩の役ハ 羽 織 三 省
 又返ッといへといふヨ日 傘 後 里 蝶

糸扱一押込と梳る古仏娘 十
 上代る秋の味知るか蓋せり 杖 丸
 滝くさい不コガ関ハとみくし 和 玉
 君子の又さるしめハ軽さざ 花 舟
 多煮生さぬやうな女房ハり 杖 丸
 椽窓ナ一子燭りふあさ松をえ 一 狂
 宴供できりク舟場の毛の門 二 角
 中しらか子しむ舟の巖 石 芦 中
 雨を答え意ハ中庭の 牛 楓 瓜

花山又て屎桶を何らしむ
 一正
 之日や、奴も杯押へられ
 春助
 右への侍う、残る刀ナ
 洗我
 いまの義彦の侍ハあまね
 小田照
 後、今も何へ喰し、一太
 和玉
 小宗老とひの介子大茶石
 歩月
 上あ、の文、一揉る
 持雨
 アレでハ、とを、ふ、鼻の也
 一正
 三女達の表へ、長宗を日、あり
 和玉

叔孫て火の虫、進不、腕、一、カナ底
 春助
 貝合セ、尻を、ル、情、一、戻、一、忌
 壽山
 何、ウ、で、注、ケ、リ、ヤ、本、一、ね、在、人
 浦丸
 又、も、も、あ、い、義、一、注、を、紙、の、云
 里竹
 海、方、一、汁、ふ、と、意、の、世、活、一、る、さ
 谷橋
 大根を、忘、む、女、夫、山、一、る
 南孝
 吾、中、も、吾、車、で、通、ふ、て、途、一、分
 一狂
 植、木、て、衰、て、又、度、一、る、麻、生、り
 土木
 新、一、い、世、と、終、り、一、刺、髪
 孤柳

必業る人か 麦 打 百女
 白牡丹之仁 木 ち の 児 眠子
 入 鼻 ぐ 居 居 居 飛 遅 く 走 とも 一 正
 下 戸 へ 注 び 笑 へ の 浅 ち 女 ち 孤 柳
 淫 り 上 来 へ て 十 分 上 務 課 せ 筆 丸
 不 来 子 妻 あり の 衣 裳 上 格 ぐ 信 ぐ 扇 門
 表 を 上 ぎ ヤ ハイ ぶ 母 へ の 衣 状 へ 全
 く 去 っ て 池 へ 来 何 ぞ 用 ひ へ 也 楓 心
 大 関 八 流 子 心 口 ぐ 味 ち ち 入 散 人

尼の厭面の注よりハ 坊一 素山
 ちのあえ 向もやん 八流大系 歩月
 妹ハすこゝあて ち 硯 石 和玉
 傘のり 糸 冷 毛 ち 久 一 ぢ ぢ の ち 志 旭
 一 心 の ね へ ぬ 不 ち 鹿 ち ち 楓 心
 画のね 上 来 へ ち 来 へ て マ 子 侍 十 子 散 人
 板 殊 笑 ち ち ち ち 士 皆 ち 教 眺 ち 花 月
 何 ち ち 一 ち ち ち ち ち ち ち ち ち 哥 山
 森 三 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 桂 雨

定こ唄く存浅く 菴 歩月
 傾城ハ書匹のたそおしく
 垣板の裡本妻めあへる 忌棧
 十分ハ暮れをあの敷入 秋丸
 史生が育てし娘後も言ふ 和玉
 身の中へある物よをけし何ども 筆丸
 運せきくろハ惚りあり 多吞
 祇抄へ母の脊のまゝ初伎り 次女
 よそがるして隣とハ不れ 寿山
 系丸

雲をまゝまゝ女房の小髪又へ 琉支
 糸あをとりて潜就坊ふ麒麟 多吞
 葵の院付く天狗来てたどり 琉支
 下戸てをいさふ路がまゝ套さね 三角
 落子等ハ撥で文を押へ舟 志旭
 替しの後が松子て味舌が招し 月心
 角濤のやうふ葱焼のふくど類 岸丸
 流石中ハ多蝶くちやハ菜種 系柙
 糸ハハヤと父へ来たを夫の状 鶴洲

巻軸

一 壽評

牛一ハ才父へ来る左夫の状 鶴洲
 悟愚を仕る乳子又入るあのみ 南孝
 安ん徳を又するふく民ほの母 一狂
 石屋へおお母の口入 洗我
 若の世の苦の世果のと托ひこ 谷橋
 二日月 殺面ものく負 月入
 多ふ義 爲の侍ハあこせぬ 小田照
 喰ふ物もや安ん毛 孫焚のじや 十八

云勝と女も多るあつの原 壽山
 傘傍と斗 晴しり初志くらね 琉文
 糸抄をとりて 潜於坊ふ麒麟 多吞
 数有がえて 扱ハぬ 南北
 数人を仕て 吾坊ハ系を立 雨篠
 禅傍の袖 去る言の侍と侍 忌穢
 縁きみのが 塞着のうと 桃溪
 秘もれを 一 爲の初 鬼丸
 秋の彦り 名の名の 永心 里標

車牛己ウチウチで己を責
 桂雨
 世を厭もやね乳唐も居ね屋
 土木
 男乳を友との旅が乳を食う
 多香
 沼子湯の位持因果の負入
 全
 雨を巻きて仲人ハ遠マ
 練石
 朽果る芥もあつたもろん
 眠子
 白挑灯母ハ子友の罵あつた
 小田照
 泥子持の去るねあつたの味
 糸柳
 ま文も九十五文も落下流
 志友

車清て時雨記の虫キカ
 眠子
 所業虫愛を所買一を
 壽山
 乳の介ふと連が志坂の於て茶
 眠子
 負けて居る乳の強心分別
 乃篠
 夫物又三月二日を清合
 志友
 大役のやと赤狗と足るね志友
 壽山
 けねけと曲掃むを伺う
 百女
 炭襖世帯の仕方透通
 土木
 物りの日ハ之後樂樂樂と化
 一正

桔梗の根枯んで戻る香坊 和玉
 画の根よきハ出てマア侍ナ子 散人
 娘未乳もきてつくり産子きふ 采帛
 耳一寸借コ重うろ百の沙 鬼丸
 露松コ蟲松鏡の毒界コ 一正
 晴松や飛コ車してハエの杭 一狂
 き人コツイ志コり志コぬ人 和玉
 樹下石上コ石をたろハ其 小田照
 又コガ眼の毒志かヌの上人 志好

徳の毒振ココゆる花のち 鶴洲
 荒しコで結句名のうハ志変 楓心
 狛楽子ハ先生ハ用ひられ 散人
 唐も持乳のそいカドコ学コ開ケ 岸丸
 味コりコ味コ仕ホ子志の味 いろは
 母も人きて未凍子命を 芦中
 薬石もガコ使者の人品 眠子
 火宅とも思えハ傍の大ふコ人 寿山
 皆きるコハ鼻コ仕して秘セ枕 花月

業をいへばむね業多
 ちまのそ実盲ラふ人
 父の乳入るふハ母の身余り
 欠落をして正なる乳を名れ
 云ふをふふんを月さく涼床
 私をいへば 日本 の 志
 在りりり秋味を唐屋
 大笑い隣のほ家の乳入り
 曲帰る送て夢ふ春の仔を
 多本 糸柳 芦中 百女 白萍 春山 全 鬼丸 和玉

畑うら田をさふ 百 姓 志友
 罾もがト苗さお乳入の秋屋 春助
 毛くたハ飲むせひハ彫了 青山
 白うううあて云ハ大 男 志棧
 父もやとふふふあひ天赦日 夏好
 歩りう乳の草おつ智の内 志友
 新い造と本一 刺 髪 孤柳
 字のてのそ尾ハ女の乳をトハ 竹
 世も子も茶を母の仕業 孤柳

仕合るに娘一家の敵よごし
 人月の丸を試以三 月
 禁し唐ても眼があをりふ
 角子まよもあそ人々角が 幸ひ
 ちの中をた斃て来る菴のあ
 づのがあそく凌子の敵へ眼
 然んもして各坊ハ系を立
 雷よそ尾して芳ふ故帳の内
 鈴鼓を仕る 芳ふ人の様云
 一止 二角 竹う 桂雨 雨篠 竹う 丑耕

之はと尻こてう通ひ止
 喰ふしけの業おて久々
 一人の羽衣後と者 遠入
 呵り人のまも果報の負よ入
 四季の樹ひ——一代目の庭
 逢ふやその氣をまきかきえ
 名仏徳ひ毒のふひ 徳
 飯汁の附々香奠の負よ入
 けふしがやしてを思ふ居りうへ
 一正 一正 寿山 秋丸 春助 歩月
 小田照 和玉 寿山 二在

訪も~~も~~異奇もを花の山 歩月
 厚皮~~く~~ハ何皮びいても 芦中
 又せ~~と~~の教傘の度ヶ格々 夏好
 仰細の服くト~~と~~せ~~ふ~~の宛を~~ふ~~
 くもく~~く~~母も悟気も付く~~ふ~~
 麻丈~~く~~て~~て~~房の捷~~は~~も
 情思の仕~~こ~~へ妻ハ~~気~~が~~白~~
 君子の又~~さ~~る~~る~~ものハ~~軽~~業
 令~~は~~檀~~罪~~の~~か~~やく~~る~~き~~い~~
 土木

傾城も切~~う~~て~~て~~居る女~~あり~~
 去~~る~~も~~ら~~れを~~涼~~切~~又~~あ~~る~~
 与~~の~~左~~の~~右~~の~~え~~る~~雨
 穂~~婆~~子~~産~~嫁~~持~~余~~一~~
 身~~二~~川~~か~~け~~と~~尻~~の~~か~~け~~根
 ほ~~生~~気~~る~~夫~~二~~流~~ふ~~て~~あ~~ふ~~老~~
 奇~~人~~との~~毛~~紙~~を~~け~~を~~て~~ご~~さ~~る~~
 大~~名~~乃~~ろ~~名~~存~~の~~不~~二
 又~~て~~縫~~い~~そ~~ふ~~二~~隣~~子~~ロ~~ッ~~シ~~ヤ~~リ~~
 浦丸
 雨條
 四季丸
 二角
 志友
 壽山
 二角
 鶴洲
 鬼丸

巻軸

草舟の歌子て喰ふ辰子如し、南北
一々の茶梅てかくは里散人

巻頭

洗我評

身代ハむうしふうの斤山泉	鶴洲
洗ハありま名まの跡	雨篠
樊舎かまはしとふ一子透	百女
花より命より白ふ田	志友
空柑くじりし出生の疏の衣	百女
櫛の切もまじりし女の衣又と	三省

中更し味方ハ乳を吞て居ル	壽山
吹引て又る物宅ハ完	歩月
瓶泊りつくく家を思案する	和王
堪忍を仕る乳又入るあのみ	南孝
洋紙の扇子と書る家の風	浦丸
父の斤き地も移て又る子	一止
茶りぬくめし屋る	眠子
二乃存程面とめく負し入	存心
除ヶとのこゝろて居る徳る父	志旭

虫殺の乳ハ懐恐ノチ高ク
姑の言をまへかろく
雨やうと云て仲人ハ
山元ルとも云れ大紋ガ
欠落をうて正直子乳を
大関を供ひ造りの糸を
夫背の志くれが京てふ
柳家うらまゝの状調多
ねも竹も竹も志くれ候
眠子
忌栞
丑栞

身ふろきハ口季をいと
尼ニ出ろ乳ニ傾博の原
宣嘆とく若ガ遠くて大
分列ハ付く候足付と枝
可り付く止女房うと
世を庇しせぬ乳房も居
江戸へ行くも母をが
うち中をまゐる付ハ
濁るぬ栞
眠子
文玉
全
土木
和玉
忌栞
花山
波静
竹

傾城ハチのた美さうらる
 宿子ガ出本以才ト美理ハ文以才
 かううさのチ高舟重の八百高
 既て神へ依力 追 後
 百をコいつちるしハ丁児居る
 もゆいとさかゝ保名ハ思て居る
 今ふ心との業持ツて文後
 七一後 寺草の住居 透通
 一寸の草トもみちの草 人
 忘核
 百女
 一狂
 志友
 忘核
 花月
 春助
 土木
 南北

負て度レと海ハ祝の乳
 梵素をぬり清きト宝去本
 初さうろ店トもハ入る命
 大矢ハ隣のほ家の乳ト隣り
 ぼまのをトハ川の 卵ハ店
 地下中が 殺入を 髪流ト住る
 尚るをトイテんト加ッて人
 せんましく口説 後とさふく神
 進うけて 居る杖ト乳の素坊
 桂雨
 青山
 琉支
 鬼丸
 琉支
 崎子
 青山
 志友
 全

貸本屋たつりさかしく世より
 後免ハスへぬ面後と名
 口説人々織る物ナニ氣藏り力
 三ツの糸志んくと娘ハ
 かんさしうがスリと井戸へあは
 次の間へ斤孫居る幸の母
 松がまきふて附候ハ 儒
 若くしうと若き孝子長は
 妹ハ苦もさふ小床合ふ足のお
 琉支
 青山
 志棧
 志旭
 一正
 練石
 秋丸
 歩月

神玉の愛ハ女の仮名きひ 孤柳
 初ウモロの状渡り候かきまゝ 二角
 記まゝ裾の長くぬきし余り 練石
 ちやうね接麻手女房丸を揉 志旭
 云うとぬまよひぬ月さゆ涼原 白萍
 貝合尻をル帳よかくし 青山
 母へ土着ハ迹て来ると 夏好
 一日ハ男ヨ夏ケぬ鹿 岸丸
 柳法へ来て大久保が齒 多吞

休何ど列いよのふしあお母へ
 運を待たぬエメリ名破道常
 迎も妹一ハ及ハぬ桃の満
 夜て居る氣の舟ぬ正 壺
 をしそんよこを素しる
 爰受て曲端よつと秋の風
 車牛己が力て己をせえ
 翁 牧も増よみ流らんゆりる筋
 根々るて引きえりし 志友

眠子 岸九 百女 花月 白萍 眠子 桂雨 南北 志友

みの流レダ下京て茶 原 志友
 ほの素石女下登い孫し 志友
 巻軸 載しと悪ホよ凌く初しと色 志友

笠折句
新板

推本下物評
三種尺

此書ハ和歌三神は他
五言句集の内秀奎
をえらび出た

笠附
折句

一日香及朱評
和歌の浦

此書ハ十言句集の内
秀奎を奉り初ん力
道去るべし

折句

浪毎十二評
芦辺の鶴

此書ハ伝吉社一書
細角力集りて古今
の名句をらむ

折句
大新板

浪花十二評
紀子玉川

此書ハを代女達人乃
名句をらむ角力
の勝劣をらむ

俳句
風俳

浪花十二評
櫻樽

此書ハいろは文字と一字
が冠りて大老の秀吟
をえらび出た

俳諧書林

紀州若山新通二丁目
帯屋伊兵衛板

